
もう少しだけ

小田原アキラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もう少しだけ

【Nコード】
N5088A

【作者名】
小田原アキラ

【あらすじ】
ずっと手を繋いでいて。安心できるまですっと、手を繋いで傍にいて。あたしが欲しいのはそれだけ。最愛の人がいる彼に愛されることはないと分かっていながら、離れられないあたしのお話です。

ずっと手を繋いでいて。安心できるまでずっと、手を繋いで傍にいて。

あたしが欲しいのはそれだけ。

ゆっくり、指を握った。きつく握ったり、優しく握ったり、遊んでいるのに当の本人は夢の中に行っちゃって、全く気付かない。

思わず顔が緩む。ソファーに寝っ転がる姿は相変わらず子供っぽい。悪戯好きのあたしが、何をしたって起きない。そういう可愛い彼を見せるのは、あたしだけじゃないのについつい喜んでしまう。

手を握っても、握り返さないのに繰り返し、繰り返し手を重ねる。

「明美さんが来たら、どうするんだよ」

彼には、最愛の人がいる。それが彼の従姉妹の明美さんだ。あたしも何度か会ってるし、二人が相思相愛であわせそうに並んでる姿を何度も目にしている。そして、誰もそこに入れない。あたしはそれを知ってるのに、どうしても彼の側を離れられずにいる。彼しかいない、彼しか愛せない。

その思いは時々、憎しみに変わることがある。このまま眠ってる彼を閉じ込めて、ずっと寝顔を眺めていたい。そんな事考えてしまうのは、彼が優しすぎるから。あたしの傍になんて、いたくないくせに突き放すことができないんだ。優しいけど、それが辛いよ。

だから憎い。時々、あたしは彼の喉元に手をかける。太くて、厚みのある首はあたしの両手でようやく収めることができる。ゆっくり力を入れる。どのくらいまで力を入れると、死んでしまうのかな？ ぼんやり考えていると、彼の目がうつすらと開いた。

驚かなかった。手もどけなかったし、力も緩めなかった。思っていたより、あたしは力を込めていない。本当は、憎くても殺したいとは思ってないから。それを彼も分かっている。

「知香」

小さくて、吐息に混ざるような苦しげな声で名前を呼ばれた。そこでようやく、あたしは彼の目の前でひどい顔をしているのに気付いた。涙が、視界を遮るように滲んで霞んでいく。彼の顔がよく見えない。

彼の手がゆつくりとあたしの手に触れた。

「触らないで。そんな風に、触らないでよ」

彼の首から手を離して、ソファーからはなれた。上着を着て、鞆を持つ。何しにきたのか分かんない。いや、分かってる。顔が見たかった。声が聞きたかった。名前を呼んで優しく触れてほしかった。それから、キスもしてほしい。でも、欲なんて持つちゃいけない。

あたしが欲張れる立場じゃない。迷惑な存在なんだ。最愛の人がいるのに、彼の傍にいたくて無理矢理、隣に座るなんて。浮気なんとするタイプじゃない。そんな器用な人間じゃない。だけど、優しいからあたしを傷くけることができない。哀れだよ。

「・・・来てたなら、起こせばいいのに」

あたしは彼に背を向けたまま、言った。

「疲れてみたいだし、起こすの悪いと思ってさ」

玄関まで、早足で歩く。といって近い距離なので、数歩ですぐに玄関だ。

「せっかくだし、夕飯食べてく？」

靴を履いているのに、わざわざ気を使う。そういうのも、優しさだね。

「いいよ。あたし手ぶらだから、せっかくの食材使うのもったいないでしょ。貧乏学生」

彼が後ろで少し笑った。その笑顔見たかったかも。そう思って、振り向いても多分見れない。あたしは靴を履き終えると、息を吐いて彼に向きなあった。

彼はあたしを見下ろしていた。玄関の段差で自然とそうなってしまっただけなんだけど。

「じゃあ、またね」

彼は、おう。という軽い返事をしてあたしを見送った。マンションの分厚くて重い玄関を開けて、それから閉めた。閉まってく扉の隙間から、彼の顔を見た。ちよつとだけ笑顔になつてゐる。これも、優しさか。

閉まつて。何も見えなくなつてから、あたしは手で顔を覆つた。涙が瞳の中で、止まつたまま動かない。好きなのに、愛してるのに、彼の心はあたしのものじゃない。声をかけられるだけで、手が震える。話をするだけで、膝が崩れそうになる。触れられたら、心臓が止まつてしまいそうになる。

何もかもが、うれしい。だから、傍にいられるだけで幸せなんだ。でも、こんなこといつまでも続かない。いつか別れはやつてくる。きつとそう遠くない未来に。

だつて彼は結婚できる歳になつてゐるし、明美さんの手には独占の証である指輪がついてゐる。あたしの指には、何もない。哀れだ。自分が哀れで、みつともない。

そろそろ、彼の部屋の前から立ち去ろうと動き始めた時、キイという小さな音でドアが開いた。そうね、いつも通りだね。あたしのこと気づかつて、気にして、玄関の前で待つてたんだよね。

「寒いんじゃない？」

「寒いよ」

「・・・昨日に誰かさんが持ってきたシチュー粉があるんだけど」
あたしが黙つてゐると、彼はゆっくりあたしに近付いてきた。そんなに距離はない。手を伸ばせばすぐに腕を捕まえられるぐらいの位置に立つてゐる。

「それから、今朝に隣の野尻から野菜おすそ分けしてもらつたんだよね。実家から一年分は保たせるようにつてさ」

くすつと、笑つた。それからあたしの手を握つた。思わず肩が震えて、涙が流れるかと思つた。

「だから、お金の心配とかいらないんだ。それでも夕飯一緒に食べ

るのヤダ？」

「ヤじゃない」

「じゃあ、作ってよ。俺のへば料理何回も食べてるだろ？」

そんな風に、誘わないで。誘惑に負けるのは、本気で好きだからなんだよ。その本気を、優しさで包もうとしないでよ。

繋いだ手に力を込めた。

それから、頷いて。震える体を動かして瘦けるように、前のめりに彼の体に抱きついた。

それでも体は震える。崩れてしまいそうだ。でも抱きとめてくれる彼の腕の中では、そんなこと考えられない。

好きです。こうして抱きしめられると、もう死んでもいいと思うぐらい。こうして過ごす二人の時間は、二人だけのものだよね。こうして会ってる時間は、あたしだけの彼なんだよね。もう少し、もう少しだけあたしに時間を下さい。

ちゃんと、別れを理解できるまで。

それまでこの手を離さないで。

（後書き）

短編は苦手です。短いストーリーの中に伝えたいことを詰め込むのは本当に苦手で、いつも短編にして出したい話は長くなることが多いです。今回も、うまくかけているかどうか、自分ではよく頑張った方だと思います。また、意見などありましたらなんでも書いてください。参考にさせていただきます。

ここまで読んで下さってありがとうございました。また短編を書けたらいいなあと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5088a/>

もう少しだけ

2010年10月8日15時07分発行